

着ぐるみ恐怖と関連する認知的要因 Masklophobia and related cognitive factors

白井 理沙子[†], 渡邊 克巳[†]
Risako Shirai, Katsumi Watanabe

[†] 早稲田大学 理工学術院
Waseda University
risakoshirai@gmail.com

概要

身体を覆うように着用する「着ぐるみ」は、広報活動等に幅広く利用されてきた。本研究は、着ぐるみに対する恐怖の生起因について調べるために、着ぐるみ恐怖に影響を及ぼす特徴、他の恐怖や個人特性との関連について検証した。実験の結果、特に顔部分の隠蔽や対象の動作性が着ぐるみに対する恐怖を促進している可能性が示された。今後の研究では、顔と身体の動きの不一致と着ぐるみ恐怖との関連について検証する必要がある。

キーワード：着ぐるみ恐怖 (masklophobia), 恐怖症 (phobias), 認知 (cognition)

1. 序論

着ぐるみは、身体全体を覆うように着用するぬいぐるみ・衣装を指す。これまで、ポジティブなイメージを伴うことを前提としてテーマパークや地域の広報活動等に幅広く利用されてきた。しかし、着ぐるみはしばしば恐怖を生じさせることが指摘されており、Google の検索サイト (<https://www.google.com>) では 3,180 件の Web ページで着ぐるみに対する恐怖と関連した情報が扱われている (2025 年 4 月 7 日時点)。着ぐるみ恐怖 (masklophobia) は、恐怖症としてアメリカ精神医学会の発行する Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders (DSM5 [1]) に掲載されていないものの、日常生活に支障をきたす場合もあり、その生起因について検討することは臨床現場における応用につながる。本研究は、着ぐるみに対する恐怖が着ぐるみのどのような特徴によって生じているのかについて検証した。また、着ぐるみ恐怖と類似した恐怖である、ピエロ恐怖、巨大物恐怖、人形恐怖、自動人形恐怖との関連についても検証した。加えて、着ぐるみ恐怖と関連する個人特性についても検討した。

2. 方法

参加者 参加者は Yahoo! クラウドソーシング

(<https://crowdsourcing.yahoo.co.jp>) を通して 200 名 (女性：63 名, 男性：132 名, 回答しない：4 名, どちらでもない：1 名) が参加した。平均年齢は 47.02 歳 ($SD=8.60$ 歳)、年齢範囲は 19 歳 ~ 60 歳であった。なお、人の入っている着ぐるみに対して恐怖・不安を感じた経験のある参加者を対象とした。

刺激・材料 参加者の個人特性について、不安特性に関する尺度 (日本語版 State-Trait Anxiety Inventory [2])、対人恐怖に関する尺度 (対人恐怖心性尺度 [3-5])、共感性に関する尺度 (日本語版対人反応性指標 [6]) を準備した。なお、日本語版 State-Trait Anxiety Inventory については、A-Trait 尺度のみを利用した。

手続き 参加者はすべての手続きをオンライン上で実施した。参加者は、着ぐるみ恐怖を感じていた時期について 5 つの選択肢 (「幼少期にあり、現在まで感じる」、「幼少期になく、現在は感じる」、「幼少期はわからないが、現在は感じる」、「幼少期にあり、現在は感じない」、「幼少期にあり、現在はわからない」) から回答した。幼少期と現在で恐怖の程度が変化している場合であっても、現在も少なからず着ぐるみに恐怖を感じる場合は「幼少期にあり、現在まで感じる」を選択するよう求めた。

参加者の内、DSM 5 における限局性恐怖症 (specific phobia) に該当する症状が着ぐるみに対して生じる参加者の割合を算出するために、DSM 5 の診断基準 [1] を参考に 7 項目を作成した (自分は着ぐるみに対する明らかな恐怖や不安がある/ 自分の着ぐるみに対する恐怖や不安は 6 ヶ月以上継続している/ 着ぐるみが実際には危険ではないと知っていながらも恐怖や不安がある/ 着ぐるみに対する恐怖や不安は、ほぼ毎日すぐに起きる/ 自分は着ぐるみを積極的に回避している/ 着ぐるみに関する恐怖や不安や回避が、自分の生活に問題を引き起こしている/ 着ぐるみの恐怖や不安は、それ以外の自分の精神状態からは上手く説明がつかない)。7 項目それぞれについて、「はい」または「いいえ」で回答するように教示した。

さらに、着ぐるみに対する感情的評価について調べるために、人の入っている着ぐるみを想像した上で、着ぐるみに対する恐怖感 (1. 全く怖くない~7. 非常に怖い) および回避の程度 (1. 全く避けたいと思わない~7. 非常に避けたいと思う) について 7 件法で回答するように求めた。また、着ぐるみの状態の違いや身体の部分的な隠蔽が恐怖感に及ぼす影響を調べるために、6 項目を準備した。それぞれの項目において、人の入っていない着ぐるみが置いてある状況、着ぐるみの頭のみ着用している人、着ぐるみの身体のみ着用している人、仮面を着用している人、口元にマスクをしている人、サングラスを着用している人を想像するように教示し、どの程度怖さを感じるかを 7 件法で回答するように求めた。また、着ぐるみの動作が恐怖の生起と関連している可能性について調べるために、「人の入っている着ぐるみが静止している状況」および「人の入っている着ぐるみが動いている状況」について想像した時にどの程度怖さを感じるかを回答するよう求めた。

また、着ぐるみ恐怖とピエロ恐怖、巨大物恐怖、人形恐怖、自動人形恐怖との関連を調べるために、ピエロやサーカスをする人、巨人や巨大なオブジェ、着せ替え人形やフランス人形、腹話術の人形やロボットに対する恐怖感についても 7 件法 (1. 全く怖くない ~ 7. 非常に怖い) で測定した。

最後に、参加者は日本語版 State-Trait Anxiety Inventory [2] の特性不安に関する項目、対人恐怖心性尺度 [3-5]、日本語版対人反応性指標 [6] に回答した。

3. 結果

着ぐるみ恐怖を感じていた時期についての回答の分布を表1に示した。本研究に参加している参加者の内、着ぐるみ恐怖を現在も感じている参加者は 200 名中 66 名 (0.33%) であった。また、限局性恐怖症に該当する 7 項目の症状が着ぐるみに対してすべて生じる参加者は 200 名中 11 名 (0.06%) であった (表 2)。

表 1 着ぐるみ恐怖を感じていた時期

恐怖を感じていた時期	N
幼少期にあり、現在まで感じる	44
幼少期になく、現在は感じる	7
幼少期はわからないが、現在は感じる	15
幼少期にあり、現在は感じない	119
幼少期にあり、現在はわからない	15

表 2 着ぐるみに関する症状の有無

着ぐるみに対する症状	N
自分は着ぐるみに対する明らかな恐怖や不安がある	98
自分の着ぐるみに対する恐怖や不安は 6 ヶ月以上継続している	70
着ぐるみが実際には危険ではないと知っていても、それでも恐怖や不安がある	114
着ぐるみに対する恐怖や不安は、ほぼ毎日すぐに起きる	65
自分は着ぐるみを積極的に回避している	85
着ぐるみに関する恐怖や不安や回避が、自分の生活に問題を引き起こしている	16
着ぐるみの恐怖や不安は、それ以外の自分の精神状態からは上手く説明がつかない	88

着ぐるみに対する不快感が認知的な評価と身体反応で異なる可能性を調べるために、人の入っている着ぐるみに対する恐怖感と回避欲求の程度について比較した。人の入っている着ぐるみに対する恐怖感 は平均 4.45 ($SD = 1.45$)、回避の程度については平均 4.56 ($SD = 1.48$) であった。対応のある t 検定の結果、有意な差は見られなかった ($t(199) = -1.54, p = .126, r = .11$)。

身体の部分的な隠蔽が着ぐるみに対する恐怖感に及ぼす影響を調べるために、1 要因 7 水準 (着用状態: 人の入っている着ぐるみ、人の入っていない着ぐるみが置いてある状況、着ぐるみの頭のみ着用している人、着ぐるみの身体のみ着用している人、仮面を着用している人、口元にマスクをしている人、サングラスを着用している人) の参加者内分散分析を行なった (図 1)。その結果、着用状態についての効果がみられた ($F(1, 199) = 84.04, p < .001, \eta_p^2 = 0.30$)。Holm 法による多重比較の結果、人の入っている着ぐるみに対する恐怖 ($Mean = 4.45, SD = 1.45$) は、人の入っていない着ぐるみが置いてある状況 ($Mean = 3.14, SD = 1.69$)、着ぐるみの身体のみ着用している人に対する恐怖 ($Mean = 3.71, SD = 1.63$) よりも高かった ($ps < .001$)。人の入っている着ぐるみに対する恐怖と着ぐるみの頭のみ着用している人に対する恐怖 ($Mean = 4.70, SD = 1.58$) の間に有意な差はなかった ($p = .074$)。

また、人の入っている着ぐるみに対する恐怖は、口元にマスクをしている人 ($Mean = 2.66, SD = 1.37$)、サ

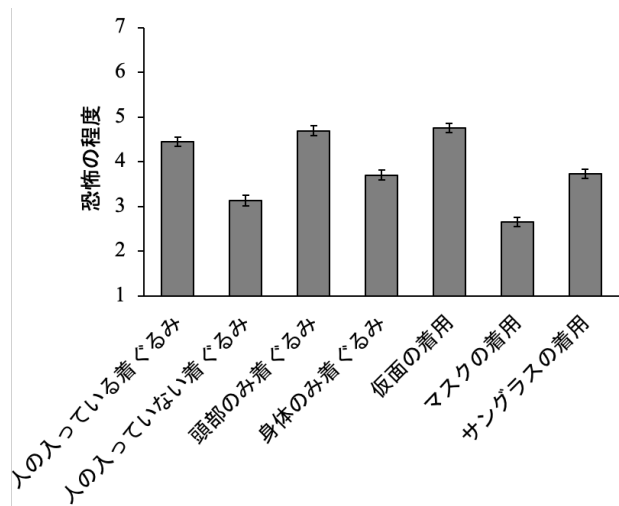


図1 恐怖の程度。エラーバーは標準誤差を示す。

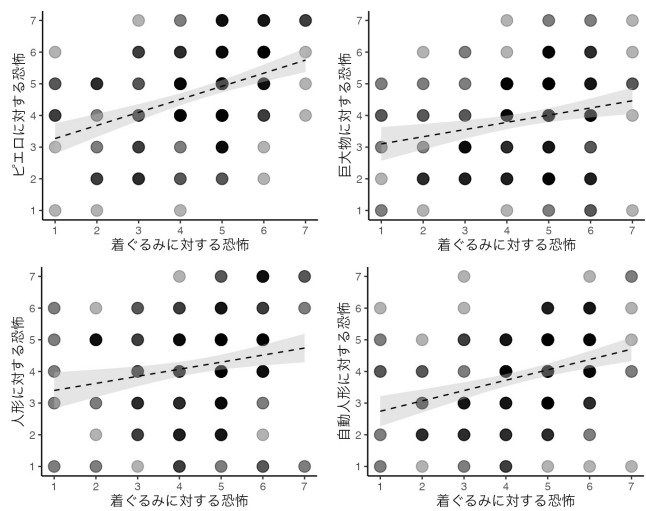


図2 着ぐるみに対する恐怖とその他の恐怖との関係性を示す。点線と周囲の幅は回帰直線と95%信頼区間を示す。

ングラスを着用している人 ($Mean = 3.73, SD = 1.51$) に対する恐怖よりも高かったが、仮面を着用している人 ($Mean = 4.76, SD = 1.34$) よりも低かった ($ps < .05$)。仮面を着用している人と着ぐるみの頭のみ着用している人、着ぐるみの身体のみ着用している人とサングラスを着用している人に対する恐怖の間に有意な差はなかった ($ps > 1.00$)。他の水準間の比較についてはすべて有意であった ($ps < .01$)。

着ぐるみの動作が恐怖の生起と関連している可能性について調べるために、「人の入っている着ぐるみが静止している状況」と「人の入っている着ぐるみが動いている状況」について想像した時の怖さの程度を比較した。着ぐるみの動作に関して対応のある t 検定を行っ

た結果、静止している時よりも動いている時の方が着ぐるみに対する恐怖が高かった ($t(199) = -2.23, p = .027, r = .16$)。

着ぐるみ恐怖とその他の恐怖との関連を調べるために、着ぐるみに対する怖さと、ピエロやサーカスをする人、巨人や巨大なオブジェ、着せ替え人形やフランス人形、腹話術の人形やロボットに対するそれぞれの怖さについてピアソンの相関係数を算出した (図2)。その結果、着ぐるみ恐怖とピエロ恐怖 ($r = .411, p < .001$)、着ぐるみ恐怖と巨大物恐怖 ($r = .218, p = .002$)、着ぐるみ恐怖と人形恐怖 ($r = .199, p = .005$)、着ぐるみ恐怖と自動人形恐怖 ($r = .337, p < .001$) に正の相関関係がみられた。

日本語版 STAI、対人恐怖心性尺度の回答に対して逆転項目の処理を行い、日本語版 STAI、日本語版対人反応性指標、対人恐怖心性尺度のそれぞれについて参加者ごとの平均値を算出した。なお、日本語版対人反応性指標については、尺度Ⅰ<自分や他人が気になる>悩み、尺度Ⅱ<集団に溶け込めない>悩み、尺度Ⅲ<社会的場面で当惑する>悩み、尺度Ⅳ<目が気になる>悩み、尺度Ⅴ<自分を統制できない>悩み、尺度Ⅵ<生きることに疲れている>悩みの6つのテーマごとに得点を算出した。また、対人恐怖心性尺度については個人的苦痛 (PD)、共感的関心 (EC)、視点取得 (PT)、想像性 (FS) の因子ごとに得点を算出した。着ぐるみに対する怖さの得点と尺度ごとの得点についてピアソンの相関係数を算出した。分析の結果、着ぐるみに対する恐怖と共感的関心 (EC) の程度に弱い正の相関がみられた ($r = .244, p < .001$)。着ぐるみに対する恐怖と個人的苦痛 (PD) の程度 ($r = .156, p = .027$)、視点取得 (PT) の程度 ($r = .196, p = .005$)、想像性 (FS) の程度 ($r = .171, p = .016$) との間にはほとんど相関関係がみられなかった。また、着ぐるみに対する恐怖と特性不安の程度 ($r = .010, p = .889$)、<自分や他人が気になる>悩みの程度 ($r = .134, p = .059$)、<集団に溶け込めない>悩みの程度 ($r = .045, p = .530$)、<社会的場面で当惑する>悩みの程度 ($r = .058, p = .415$)、<目が気になる>悩みの程度 ($r = .067, p = .344$)、<自分を統制できない>悩みの程度 ($r = .014, p = .841$)、<生きることに疲れている>悩みの程度 ($r = -.006, p = .930$) との間には相関関係はみられなかった。

4. 考察

本研究は、着ぐるみ恐怖の生起因を調べるために、着ぐるみのどのような特徴が恐怖を引き起こしているかについて検証した。実験の結果、着ぐるみは頭部のみの着用であっても身体全体を覆うように着用した場合と同程度の恐怖を引き起こすことが示された。また、身体全体を覆うように着ぐるみを着用した場合に、身体のみ着ぐるみを着用している状態や、サングラスやマスクによって顔の一部のみが隠れている場合よりも強い恐怖感を引き起こした。これは、特に顔の隠蔽が着ぐるみに対する恐怖を促進している可能性を示している。また、着ぐるみに対する恐怖は、ピエロや自動人形に対する恐怖と関連している可能性が示された。着ぐるみ、ピエロ、自動人形には、人型かつ動作のある対象物という共通点があり、これらの要素が着ぐるみ恐怖と関連している可能性がある。さらに着ぐるみ恐怖は、ネガティブな状況下にある他者に対する思いやりや関心 [7] と関連していることが示された。着ぐるみが無表情であることや着ぐるみの操演者と関連した情報 (e.g., 疲労感の想像) が着ぐるみに対する不快感と関連している可能性について検証する必要がある。

表情に関する処理には顔の視覚的特徴だけでなく身体の動きや周囲の環境のような状況的文脈も影響を及ぼしていることが報告されてきた [8]。さらに、顔と身体の感情の一致性について敏感に反応する神経機構の存在も指摘されている [9]。多くの着ぐるみは、身体動作に伴って表情が変化しないため、顔と身体の動きの不一致が生じることになる。今後の研究では、顔と身体の動きの不一致が着ぐるみに対する不快感と関連している可能性や、身体が動いているならば顔も動くという信念が着ぐるみ恐怖に及ぼす影響についても検証する必要がある。

5. 参考文献

- [1] American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fifth edition*. American Psychiatric Publication. Washington, DC.
- [2] 清水 秀美・今榮 国晴 (1981). STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版 (大学生用) の作成 教育心理学研究, 29(4), 348-353.
- [3] 堀井 俊章 (2011). 大学生における対人恐怖心性の時代的推移 横浜国立大学教育人間科学部紀要, 13, 149-156.

- [4] 堀井 俊章・小川 捷之 (1996). 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報, 20, 55-65.
- [5] 堀井 俊章・小川 捷之 (1996). 対人恐怖心性尺度の作成 (続報) 上智大学心理学年報, 21, 43-51.
- [6] 日道 俊之・小山内 秀和・後藤 崇志・藤田 弥世・河村 悠太・野村 理朗 (2017). 日本語版対人反応性指標の作成 心理学研究, 88(1), 61-71.
- [7] Davis, M. H. (1980). A multidimensional approach to individual differences in empathy. *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology*, 10, 85.
- [8] Wieser, M. J., & Brosch, T. (2012). Faces in context: A review and systematization of contextual influences on affective face processing. *Frontiers in psychology*, 3, 471.
- [9] Meeren, H. K., Van Heijnsbergen, C. C., & De Gelder, B. (2005). Rapid perceptual integration of facial expression and emotional body language. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 102(45), 16518-16523.